閩南語「有／無」と動詞の分類

村　上　之　伸

1．はじめに
2．動詞の分類
3．非動作動詞①②と「有／無」
4．非静止性動詞③④⑤(1)と「有／無」
5．静止性動詞⑤(2)⑥と「有／無」
6．「有／無」の意味
〈注〉
参考文献

1　はじめに

閩南語は漢語方言の有力な一つである。そこにみられる「有（ū)と「無(bô)」は共通語の「有／没有」に相当し，「有／没有」がもつ存在・所有の意味とは次のような対応をみせる。

(1)　Chia bô chheh.（這無冊）〈這裏没有書〉[1)]

(2)　Góa ū nn̄g pún chheh.（我有兩本冊）〈我有兩本書〉

閩南語「有／無」はその他にも共通語「有／没有」にはみられない極めて特殊な現れ方をする。例えば

(3)　Hit niá sa^{n} bô súi.（彼領衫無美）〈*那件衣服没有漂亮〉[2)]
〈那件衣服不漂亮〉

(4)　Cha-hng góa ū bé chit pún siáu-soat.（昨昏我有買一本小説）
〈*昨天我有買一本小説〉〈昨天我買了一本小説〉

(5)　Tâi-oân-oē góa thia^{n} bô.（台灣話我聽無）〈*台灣話我聽没有〉
〈台灣話我聽不懂〉

(3)(4)は「有／無」が形容詞句，動詞句にそれぞれ先行する例で，(5)は動詞の後に「有／無」が出現する例であるが，全て共通語の「没有／有」と対応していない[3)]。

動詞，形容詞と共起する「有／無」については以前から研究がされている。

その中で「有／無」の品詞についてはさまざまなとらえかたがされてきた。“過去の動作を表わす”としたのは台湾総督府（1932），李（1950）などで初期の研究ではこのように扱われていた。“情意詞”という品詞をたてて，「有／無」をそこに含めたのは王（1957）で，

(6) Bîn-á-chài ū khì hák-hāu.（明仔再有去学校）

という未来の表現を例に挙げ，「有／無」には“確認をあらわす”意味があるとした。その後の中嶋（1971）ではアスペクトマーカーとみなして，「有／無」に「その動詞・形容詞の動作相（あるいは時点性）を静止相（あるいは継続性）に shift させる機能」があると述べた。また樋口（1977）では動詞とみなし，「有／無」は性状，事態の“存在”を表わすとした。最近では姚（1986）が“有”のみの特性を述べて，「有／無」を助動詞とみなしている。

拙論では，共通語の動詞を分類した後に，閩南語「有／無」と共通語の表現形式を対照させ，「有／無」全体の文法的意味を検討したい[4]。

2　動詞の分類

本論で扱う“動詞”とは，広義の意味で形容詞も含む，中国語で言うところの“謂詞”である。そうしたのは閩南語「有／無」の文法的意味を考える場合には，言うまでもなく形容詞も無視することができないからである。

まず，形容詞は，朱徳熙（1982），ヤーホントフ（1957）を参考とし「“很・最・更”といった程度副詞を先行でき，賓語が置けない動詞」と定義する。以下は形容詞（後述の①の動詞）の例である。

貴，大，遠，好，胖，高，冷，熱，甜，難，軟，香，厚，紅，硬，容易，美麗，舒服，親熱，熱鬧，緊張，奇怪，聰明など。

更に狭義の動詞を動作行為の完了，発生の否定副詞“没（有）”が先行できるかどうかで二つに分ける。先行できない動詞を以下に挙げる。

怕，愛，想，恨，像，相信，懐疑，喜歓，羨慕，了解，明白，知道，認識，是，叫，姓など。

これらは状態性のみを表すので“状態動詞（後述の②の動詞）”とする[5]。形容詞と状態動詞は動作性を持っていないという点で共通しているので，まとめて“非動作動詞”とする。

次に“動作動詞”を下位分類する。まずアスペクト詞“着（zhe）”が共起できるかどうかで二つに分類する。“着”には“動作や状態を持続”させる働きがある。逆に言えば，共起できない動詞は持続性を備えていないのであ

る。例えば

＊他去着學校。

という文は成立しない。この種の動詞を“非持続性動詞（後述の③の動詞）”とし以下のような動詞を含める。

死　傷　斷　熄　完　了(liǎo)　來　回　去　到　中　熟　敗　没　合併
出現　成立　批准　出嫁　投降　結束　看見　聽見　遇見　解開　離開
分開　辦成　画成　記住　提出　修好　学會　吃飽　叫醒　幹完　起來
上來　進來　出來　回來　上去　下去　出去　進去　回去など

“着”をとることができる動詞“持続性動詞”をさらに意味から分類する。

“着”が動詞と共起する場合，動詞によって“着”はその意味的作用を変える。例えば，

①他們一碗又一碗地喝着水。（彼等は一碗，一碗と水を飲んでいる。）

②門口站着兩三個人。（入口に２，３人の人が立っている。）

①の文は“飲む”動作の持続であり，よく副詞“正在・在”を伴うことがある。それに対して，②の文は“立った”という瞬間的動作の終了後の静止状態（立っている）の持続を表わしている。

また動詞によっては“着”を付けて上の両義を表わすものがある。例えば，“貼”という動詞は，

他正在貼着海報。（彼はいまポスターを貼っているところだ。）

という文において，“着”は“貼る”という動作を持続させる働きをしているが，

磚墻上貼着海報。（れんがの壁にポスターが貼ってある。）

という文では，“貼る”動作終了後の静止状態を持続させる働きをしている。

以上の“動詞＋着”の場合の意味の違いから“持続性動詞”を以下のように三つに分類する。尚，動詞の例は馬（1981）を参考とした。

〈動作の持続のみを表わす動詞（後述の④の動詞）〉

着　聽　說　學　問　教　改　做　幹　造　查　罵　打　偷　搶　抽　演
洗　刷　灑　掃　摘　拾　修　翻　搜　推　剪　裁　抹　吃　喝　嘗　等
喊　摸　花　削　求　買　賣　敲　投　告訴　分析　比較　批評　表揚
答應　介紹　研究など

〈動作と静止状態の持続の両方を表わせる動詞（後述の⑤の動詞）〉

掛　擺　插　貼　裝　鋪　鎖　開　關　包　塡　蓋　停　蒙　吊　架　種
栽　擠　拿　穿　戴　披　寫　印　搭　刻　放　疊　點　縫　存　支　租

借　貸　畫　埋など

〈静止状態の持続のみを表わす動詞（後述の⑥の動詞）〉

站　坐　蹲　躺　趴　跪　垂　臥　浮　騎など

以上が，閩南語「有／無」と共通語を対応させるために行った動詞の分類である。ここでは，動作の持続と静止状態の持続の両方を表わせる動詞について，一方を動作の持続を表わす動詞（後述の⑤(1)の動詞）に，もう一方を静止状態の持続を表わす動詞（後述の⑤(2)の動詞）に含めて考えることにする。このようにして出来た分類は次のようになる。

- 動詞
  - 非動作動詞
    - 形容詞…①
    - 状態動詞…②
  - 動作動詞
    - 非持続性動詞…③
    - 持続性動詞
      - 非静止性持続動詞…④⑤(1)
      - 静止性持続動詞…⑤(2)⑥

3　非動作動詞①②と「有／無」[6]

形容詞は次のように「有／無」と共起できる。

(7)　I ū hoa^{n}-hí.（伊有歡喜。）

(8)　I bô hoa^{n}-hí.（伊無歡喜。）

これを共通語と対応させると，

(9)・他高興[7]。

(10)　他不高興。

となる。否定形の対応は問題ないが，“他高興”という形は比較・対照の状況がなければ不自然である。閩南語でもこのような状況であれば共通語の(9)に相当する

(11)　I hoa^{n}-hí.（伊歡喜。）

という表現があるので，(7)の“有”を伴う表現と整然と対応する表現が共通語には存在しないことになる。

また状態動詞はどうかというと，共通語と以下のような対応をする。

(12)　Góa ū ài i.（我有愛伊。）〈・我愛他。〉

(13)　Góa bô ài i.（我無愛伊。）〈我不愛他。〉

(14)　I ū sêng in lāu-pē.（伊有成□老父。）〈・他像他父親。〉

(15)　I bô sêng in lāu-pē.（伊無成□老父。）〈他不像他父親。〉

やはり状態動詞の場合も形容詞の場合と同じで，肯定形が問題となる。例えば，共通語の“我愛他”に対応する閩南語はやはり

⑯　Góa ài i.（我愛伊。）

であり，“有”を用いた表現に対応する共通語は存在しない。

また荒川（1981）は，状態動詞の「信，愛，恨」などは“状態性”の他に“自制性（自分の意志で制御できる性質）”を備えており，否定の“不”を伴うと両義的になるという[8]。例えば

我不愛他。

という文は

①私は彼を愛していない。〔－自制性〕

②私は彼を愛さない。　　〔＋自制性〕

というように両義的である。これにあたる閩南語の表現は

⑰　①Góa bô ài i.（我無愛伊）

⑱　②Góa m̄ ài i.（我唔愛伊）

である。つまり〔－自制性〕の否定には“無”を用い，〔＋自制性〕の否定には単純否定の“唔”を用いるのである[9]。

さて，ここで「有／無」が非動作動詞と共超する場合の意味についてまとめてみる。共通語との対応をみると，“無”は“状態・性質の否定”であると言える。しかし“有”は

⑲　Góa hūn lí.（我恨汝）

⑳　Góa ū hūn lí.（我有恨汝）

という肯定の二文が共に状態性をもち，“有”が状態性を表すのに不可欠ではないとなると，単に“状態・性質の肯定”であるとは言えない。“有”を理解するため，上の二文の意味的差異を考える必要がある。⑲は共通語“我恨你”に相当し，“私はあなたを恨んでいる”という客観的な状態の描写である。それに対し，⑳は共通語にこれ相当する表現がないが，意味的な面のみで近い表現を捜せば，

我<u>的確</u>恨你。

となるであろう。つまり，この“有”は主観的な語気を状態に加える働きを持っているのである。

4　非静止性動詞③④⑤(1)と「有／無」

㉑　I ū lâi.（伊有來。）

　　I bô lâi.（伊無來。）

㉒　I ū bē chit pún siáu-soat.（伊有買一本小說。）

　　I bô bē chit pún siáu-soat.（伊無買一本小說。）

上の文は両義を持っている。ひとつは規則的反復であり，ひとつは過去性である。

“逐日（ták-jit）〈毎天〉，逐年（ták-nî）〈毎年〉，逐暗（ták-àm）〈毎天晩上〉”等，反復性を持った語を伴うか，あるいはそのような文脈があれば，「有／無」は動作の規則的反復性を意味するようになる[10]。

(23) Góa ták-jit ū khì hák-hāu.（我逐日有去學校。）〈・我毎天去學校。〉

(24) Góa ták-jit bô khì hák-hāu.（我逐日無去學校。）〈我毎天不去學校。〉

共通語との対応をみてみると，閩南語の“無”は共通語の“不”と対応している。しかし閩南語“有”は完全には対応していない。なぜなら共通語の肯定の表現“我毎天去學校”は閩南語にも存在するからである。

(25) Góa ták-jit khì hák-hāu.（我逐日去學校。）〈我毎天去學校。〉

(23)と(25)の意味的差異を考えると，(25)は単なる事実の客観的描写であるのに対し，(23)は主観的な語気が強く出されるのである。例えば，自分が毎日，学校に行っている事実を信じていない人に，その事実を信じさせようとする時は(23)の表現を用いる。

また，今までも規則的反復の動作が行われていたというような条件があれば，“未来”の表現が可能になる。例えば

(26) I bîn-á-chài ū lâi.（伊明仔再有来。）

この場合，以前からそのような規則的な反復性があり，明日もいつも通りに来ることを主観的な語気を強めて言っているのである。

(21)(22)を両義にさせる「有／無」のもうひとつの働きは，以前“過去性”を示すとして扱われていたものである[11]。対応する共通語は次のようである。

(27) Chá-khí góa ū chiáh nn̄g oáⁿ pn̄g.（早起我有食兩碗飯。）〈・早上我吃了兩碗飯。〉

(28) Chá-khí góa bô chiáh nn̄g oáⁿ pn̄g.（早起我無食兩碗飯。）〈早上我没有吃兩碗飯。〉

否定文は“没有”できちんと対応しているが，肯定文ではきちんと対応していない。上のような，つまり共通語において，完了の表す接辞“了”やその否定“没有”と具体的な数量詞を伴ってつくられた形式は過去の事柄を表出している[12]。しかし共通語との対応をみる限り，閩南語の否定“無”は過去を表しているといえるが，“有”はそのようにはいえない。さらに閩南語には共通語の完了を表す接辞“了”に意味的に対応するものとして“啊(ah)”が存在している[13]。

(29) Chá-khí góa chiáh nn̄g oáⁿ pn̄g ah.（早起我食兩碗飯啊。）〈早上我

吃了兩碗飯。〉

となると，㉗と㉙の意味的差異を考えなければならなくなる。㉙は客観的な事実であり，“朝御飯何杯飯べましたか？”といった質問に対する答えである。それに対して㉗は過去の事実に主観的な語気を含めた表現であり，“朝御飯二杯も食べたって本当？”といった質問に“自分は本当に食べたんだ”という語気を含めた表現である。つまり，「有／無」はこの種の動詞についても，以前言われていたように“過去テンス性”を示すための語であると完全には言えないのである。

今までは「有／無」がこの種の動詞に先行する場合のみを考えてきたが，非静止性動詞④⑤(1)の一部は“V＋有／無”という表現が可能である。この場合，共通語では次のように対応する。

㉚ Góa bē ū.（我買有。）〈我買得到。〉
　Góa bē bô.（我買無。）〈我買不到。〉

㉛ Góa chhōe ū.（我□有。）〈我找得到。〉
　Ū chhōe, m̄-kú chhōe bô.（有□，唔拘□無。）〈找了，不過找不到。〉

このように共通語のいわゆる「補語」の“到”と対応している。つまり“V＋有／無”は動作の行為に注目しているのではなく，結果に注目しているのである。㉛の否定はそのことを証明している。

しかし共通語の動詞に補語“到”がつく場合全てが“V＋有／無”で対応できるかというとそうではない。まずこの表現が可能な動詞を列挙する。

“買（bē），借（chioh），□（chhōe）〈找〉，趁（thàn）〈賺〉，釣（tiò），收（siu），□（the̍h）〈拿〉，聽（thia^{n}），看（khòa^{n}）”

これらに共通な特徴は動作終了後，何かを得る点である。例えば“買った”という動作が達成した後は必ず“買ったもの”を得るはずであり，“捜した”という動作が達成した後は必ず“捜していたもの”を得るはずである。

また“V＋有／無”の動詞が“聽（thia^{n}），看（khòa^{n}）”といった知覚動詞の時，「有／無」は共通語の“到”ばかりでなく“懂”とも対応する。

㉜ Góa thia^{n} ū.（我聽有。）〈我聽得到。／我聽得懂。〉
　Góa thia^{n} bô.（我聽無。）〈我聽不到。／我聽不懂。〉

例えば，“聞いた”という動作が達成した後，“聞いている音声”を耳で得た場合は“聽得到”になり，“聞いた”という動作が達成した後，“聞いている音声”を理解して得た場合は“聽得懂”となる。二つの状況は異なるが，両方とも“聞いているが音声”を得たかどうかに注目している。

5　静止性動詞⑤(2)⑥と「有／無」

共通語に対応する語が比較的多様であるため，いくつかに分けて考えてみる。

まず“場所詞＋動詞＋名詞”という構造の存在文に「有／無」が付いた場合は次のような対応をみせる。

(33)　O'-pang-téng ū sía jī.（烏枋頂有寫字。）〈黒板上寫着字。〉
　　O'-pang-téng bô sía jī.（烏枋頂無寫字。）〈黒板上没寫着字。〉

(34)　Mng̍-kha-kháu ū khīa chin chē lâng.（門脚口有竪真多人。）〈・門口站着很多人。〉
　　Mng̍-kha-kháu bô khīa chin chē lâng.（門脚口無竪真多人。）〈門口没有站着很多人。〉

(33)は，動詞が⑤(2)の例でこの場合「有／無」が共通語の“v着”“没有v着”ときれいに対応する。さらに閩南語では，⑤(2)の動詞を用いた存在文を共通語の“着”に相当する語で表現できない。このことはつまり「有／無」が⑤(2)の動詞の静止状態の継続を表していることを示している。

(34)は，動詞が⑥の例で否定の“無”は“没有v着”と対応するが，肯定の“有”は“v着”と対応しない。なぜなら閩南語にも共通語“v（⑥の動詞）着”と自然な対応を示す表現が他に存在するからである。例えば(34)の肯定の共通語に対応する閩南語は

(35)　Mng̍-kha-kháu khīa chin chē lâng.（門脚口竪真多人。）

となる。閩南語において，⑥の動詞の存在文は，その動詞が単独で用いられ静止性を表すのである[14]。では“有”にどのような働きがあるのだろうか。(34)の肯定文と(35)の文の現れる場面の違いに注目しここでの“有”の働きを考える。(35)の文は“立っている”という状態のみに注目されている客観的な表現である。それに対し(34)の肯定文は，例えば動物園の園長が開園直前に客の出足を尋ねた時の従業員の答えに用いられる。その時の客が多いか少ないかという判断は従業員が決めることである。つまり“有”がある文は状態の持続に主観的な語気が加わっていると言うことができる。

また，閩南語“有V在L／無V在L（場所詞）”は⑤(2)⑥の動詞共に次のように対応する[15]。

(36)　Iû-phiò ū tah tī sìn.（郵票有貼在信。）〈・郵票貼在信上。〉
　　Iû-phiò bô tah tī sìn.（郵票無貼在信。）〈郵票没有貼在信上。〉

(37)　I ū chē tī í-á.（伊有坐在椅仔。）〈・他坐在椅子。〉

I bô chē tī í-á.（伊無坐在椅仔。）〈他没有坐在椅子。〉

否定の“無”は共通語の“没有”と対応して，静止状態の否定を表しているのだが，肯定の“有”は“無”のような自然な対応がみれない。なぜなら閩南語には“有”を付けない

㊳ Iû-phiò tah tī sìn.（郵票貼在信。）

㊴ I chē tī í-á.（伊坐在椅仔。）

という言い方が存在し，それが共通語の“V在L”と対応するからである。では閩南語の“有”の有無によって意味にどのような差異が生じるのであろうか。例えば，㊳は，切手はどこにあるかという問いに対する答えに用いられ，㊱の肯定文は，親の“切手はちゃんと貼ってあるか”という問いに，手紙を出しにいく子供が間違えなく貼ってあると答える時に用いられる。つまり“有”がない文が事実のみで，ここでは“貼ってある”状態を単に述べているだけなのに対し，“有”がある文は状態だけでなくそれに主観的な語気を加えて述べているのである。

さらに⑤(2)⑥動詞の多くは，閩南語においても自動詞としての用法を作ることができ，その場合も「有／無」と共起できる[16]。

㊵ Thang-á-mn̂g ū khui le.（窗仔門有開□。）〈・窗戸開着。〉
Thang-á-mn̂g bô khui le.（窗仔門無開□。）〈窗戸没有開着。〉

㊶ I ū khiā le.（伊有竪□。）〈・他站着。〉
I bô khiā le.（伊無竪□。）〈他没有站着。〉

上のように“無”は“没有”と対応しているが，“有”はきちんと対応しているとは言えない。文末の“le”は動作・状態の静止を表わし，文全体を落着かせるために必要になる[17]。つまり㊷のように閩南語“le”を持つ文は共通語の“着”を伴う文に意味的に対応するのである。

㊷ Thang-á-mn̂g khui le.（窗仔門開□。）〈窗戸開着。〉

では“有”にはどのような働きがあるのだろうか。㊵の肯定文と㊷を意味的に比較して“有”の働きを考えてみる。㊷がその状態が持続されているという事実のみに注目しているのに対し，㊵は，例えば部屋に入った母親が空気が悪いけど，窓は開いているかどうかを尋ねた時に子供の答えになる。つまり，㊵は事実だけでなく，発話者の確かにそうであるといった主観的な語気が含まれた表現なのである。ここでも“有”はこのように主観的な語気を表わしている。

6 「有／無」の意味

今までは「有／無」を共通語と対応させながら，その現象のみに注目してきた。ここではそれらを総合して「有／無」の文法的意味について考えてみたい。

まず，共通語との対応で現れた二つの問題を挙げる。

・動詞の性格，文の構造によって「有／無」の意味が異なる点。

・“有”がほとんどの場合主観的な語気を持っている点。

この二点は一見複雑そうだが，動詞に先行する「有／無」も広義の“存在”を表す動詞とすると解釈できるのである[18]。

第一点を考察するにあたって，まず共通語で“存在”と言われている例を考えることから始める。

〔存在〕

(43) Hit-pêng ū siû-phiò-chhù.（彼旁有售票處。）〈那裏有售票處。〉

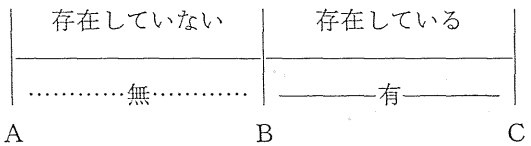
(44) Hit-pêng bô siû-phiò-chhù.（彼旁無售票處。）〈那裏没有售票處。〉

〔所有〕

(45) Góa ū hit ki pit.（我有彼枝筆。）〈我有那枝筆。〉

(46) Góa bô hit ki pit.（我無彼枝筆。）〈我没有那枝筆。〉

これらの「有／無」の意味は簡単な図にすることができる。



例えば，(46)はA—B間の表現であり，(45)はB—C間の表現である。そしてB点は存在し始めた点で，“あのペン”を買ったか，貰ったか，といった行為によって存在するようになった点である。しかし存在の表現は当然のことながら，A—C間のある一点においての存在に注目されていて，B点でのどのような行為が“ペン”を存在させるようになったか，それがいつから存在し続けているかといった点については注目されてないのである。この存在という点から，動詞に先行する「有／無」を前述の動詞の分類に従って考えて，一つ目の問題を考察してみる。

非動作動詞①②はA—B間で“状態・性質”が存在していないのだから“無”を用いる。B—C間では“状態・性質”の持続が存在しているので“有”を用いる。

静止性動詞⑤(2)⑥の時も同様に考えられる。A—B間は動作が行われてないのだから“静止状態”は存在しないので“無”を用いる。B—C間は動作後の静止状態が持続している。静止状態が持続され存在しているので“有”を用い表現される。

非静止動詞③④⑤(1)は単独では瞬間の動作しか表さない。A—B間ではその動作が行われない，つまり存在しないので“無”を用いる。瞬間動作なのでB点で動作が行われた後，B—C間に状態としては何も存在しないがただ時間の経過のみが存在する。つまりB点から発話の点までの時間の経過を存在ととらえていることが，その瞬間動作を過去時の行為とさせているのである。

またこの動詞が規則的反復を表している時は，B—C間で一回の瞬間動作に注目しているのではなく，動作が規則的に繰返されるという反復性に注目されている。例えば，

(47) I ták-nî ū khì tiong-kok, Góa ták-nî bô khì tiong-kok.（伊逐年有去中国，我逐年無去中国。）〈他毎年去中国，我毎年不去中国。〉

という文で，彼は毎年中国に行くので，規則的な反復が存在するが，私は中国に行ったことがあっても，毎年という規則的反復は存在しないのである。

最後に④⑤(1)の動詞を用いた“v＋有／無”について述べてみる。“v”の動作そのものはここでは問題にされてはなく，動作終了後その場に残った物が存在しているかが問題になっている。言い換えれば“v＋有／無”は達成・到達したという結果を物や他の何かで得ているかどうかが問題にしているのである。例えば前述したように“□有〈找到〉”は，捜すという行為の結果みつかり，捜していた対象物がある場所に存在しているということで，“□無〈找不到〉”は捜すという行為の結果みつからず，対象物も存在していないということである。

以上のように「有／無」を存在の動詞とすることで動詞の性格による意味の違いが理解できる。

二つ目の“有”に主観的な語気が伴うという点も“有”が存在を表わすことと関わってくる。まず，共通語でも用いられる，存在するものが名詞の場合を考えてみる。

(48) O͘-pang-téng ū jī.〈烏枋頂有字。〉（黒板上有字。）

(49) Góa ū hit pún chheh.〈我有彼本冊。〉（我有那本書。）

(48)の“有”は狭義の存在，(49)の“有”は狭義の所有である。(48)の“字”の存在は必ず黒板の上でなくてはいけないが，(49)における“あの本”はどうかというと，必ずしも発話の時点で自分が抱えている必要はないのである。自

分の家にあっても，他人に貸していても，いっこうに構わないのである。ここで問題なのは“私”と“あの本”の関係で，“所有”しているかどうかは発話者だけが知っているのである。例えば本屋の店員が“あの本”を手に持って客に渡しに行くとき，その姿を自ら㊿で表現することはできない。しかし店員と“あの本”の関係がないことを全く知らない人なら㊿のように言うことができる。

㊿ I ū hit pún chheh.〈伊有彼本冊。〉(他有那本書。)

(51) Góa ū chū-sìn.〈我有自信。〉(我有自信。)

更に(51)のように存在物が具体的なものではない場合では発話者の主観が際立って強く表現される。

つまり狭義の存在が具体的な物の（広義の）存在を表現しているのに，狭義の所有は発話者の主眼によって（広義の）存在を表現し，特に具体的な存在物ではない時は主観が強く表現されるのである。

動詞に先行する“有”に目を向けてみる。例えば①の動詞を例にとると，

(52) Toh-á-téng ū chheng-khì.（桌仔頂有清気。）〈・桌子上干浄。〉

(53) I ū láu-sit.（伊有老實。）〈・他老實。〉

(52)の“存在”，(53)の“所有”共に主観的な語気を伴う。これは動詞に先行する“有”は存在物が極めて抽象的な“動作・性状”であるためである。“桌仔頂”という具体的な場所であっても，“清気”という状態は発話者の主観が伴うのである。しかし動詞に先行する“有”は必ず主観的な語気を伴うとは言えない。例えば

(54) O'-pang-téng ū sía jī.（烏枋頂有寫字。）〈黒板上寫着字。〉

という⑤(2)の存在文では主観的な語気はなく共通語と同様に描写的，客観的な状態を表現している。これは“烏枋頂”が具体的な場所であり，かつ“寫”が“字”をある場所に“付着”させる性質があるからである。つまり(54)で“烏枋頂”に存在するのは“字”なのである。そして今まで二つに分けてきた⑤(1)と⑤(2)は閩南語の「有／無」との共起でみると“所有”と“存在”の関係になるのである。勿論，⑤(1)の動詞では主観的な語気が現れる。

(55) Góa ū sía jī.（我有寫字。）

以上のことから“有”を用いた表現に主観的な語気が伴うのは，主語が具体的な場所でない場合，または存在物が具体的な事物でない表現の場合であることが理解できた。

拙論では「有／無」の文法的意味について考えてきた。そして「有／無」は存在の動詞であり，“有”が他の動詞と共起する時に現れる主観的な語気

もそれに起因する，と論じた。

今後は更に「有／無」と“是”あるいは「有／無」と静止状態を示す“le”といった要素との相互関係に注目していきたい。

〈注〉

1）閩南語は教会ローマ字で示した。（ ）内は適すると思われる閩南語の漢字で，〈 〉内は対応する共通語である。また閩南語に適する漢字がない場合は□で示した。

2）＊は成立しないことを表わす。

3）共通語にも閩南語のように動詞の前に用いることができるが“有”があるが，それらは「有吃有穿」「有来有去」などのように，慣用句の形で現れるのみである。

4）ここで調査の対象とした閩南語は“台湾閩南語”である。インフォーマントとして閩南語を母語とする麗沢大学講師・彭春陽先生，別科生数名に御協力頂いた。ここに感謝の意を表したい。

5）状態動詞という名称は荒川（1980）による。

6）非動作動詞の全てが「有／無」と共起できるとは言えない。それらの多くは状態性を欠く動詞である。例えば繋合的な“是（sī）姓（sèⁿ）叫（kìo）”，知覚・認識を表わす“知影（chai-iáⁿ）□（bat）〈認識〉”，是非を表わす“好（hò）對（tiòh）”能願動詞“應該（ènh-kai）敢（káⁿ）”望ましくない感じを表わす形容詞（Susie S. Cheng（1981）が詳しい）“刺（chhì）懶（lán）”などがある。

7）・は共通語のみに用い，“閩南語と対応してはいないが，意味的・肯定否定の関係から最も適すると判断した表現”を示す。

8）「自制性」という概念は日本語学の久野（1973）からである。

9）P. J. Li（1971），樋口（1977）も指摘している通り，「唔」には二つのタイプがある。一つは意欲の否定であり，もう一つは単純否定である。

10）“規則的反復”とは広義であり“習慣”と狭義の“規則的反復”も含む。山田（1984）『アスペクト論』p. 134～d. 138を参考。

11）李（1950），台湾総督府（1932）など。

12）chao（1968）p. 702“～if there is a quantified object and the verb refers to past action, a perfective-aspect suffix le is required.”を参考とした。

13）共通語の完了が「了／没有」となるからといって，閩南語で「啊／無」とすることはできない。

I ū khì iá-sī I bô khì？（伊有去抑是伊無去？）

I khì ah iá-sī I iáu-bōe khì？（伊去啊抑是伊猶未去）

二つの反復疑問文にみられるように，閩南語には「有／無」「啊／猶未」という整然とした二組の関係が存在するのである。“猶未”は共通語の“還没有”に相当する。この点については Lin（1975）が詳しく述べている。

14）共通語の⑥について荒川（1980）は「実際これらの動詞が使われるのは～“在”や“着”と結合してであり，動詞そのものについては ～bound from ともいえるのであ

る。」と述べているが，閩南語の存在文では単独で用いられる。

15) “開（kui）關（koaiⁿ）租（chó）鎖（so）借（chioh）包（pau）”など付着する性質を持たない動詞はV在L構文はつくれない。

16) ⑤(2)の動詞全てが自動詞的用法ができるのはない。“寫（sía），繡（siù），畫（oē）題（tê），刻（khek），斲（chám）”などは他動詞の素性だけを有する動詞であるため，自動詞的用法ができない。

17) “□（le）”が付かなければ，⑤(2)は⑤(1)との曖昧さが生じ，⑥は成立しない。

18) 閩南語の「有／無」の意味“所有”と“存在”を広義の“存在”に含めることは樋口（1977）で述べられている。

19) “無（bô）〈没有〉”も同様に主観性を備えているが，この論では共通語との対照で差異がみられた“有”のみに注目する。

参 考 文 献

荒川清秀　1980.「中国語の状態動詞」『愛知大学文学論叢』第65号

――　1981.「中国語動詞にみられるいくつかのカテゴリー」『文学論叢』第67号

――張　婉行　1987.「“不”と“没”」『愛知大学外語研紀要』第11号

中嶋幹起　1971.「福建語における“有”“無”の語法範疇について」『アジア・アフリカ言語文化研究４』

樋口　靖　1977.「福建語の否定詞ＢＯとＭについて」『中国語学』224号

久野　暲　1973.『日本文法研究』大修館

矢野光治・藍　清漢　1979.「漢語の存在文について」『中国語学』226号

山田小枝　1984.『アスペクト論』三修社

Chao, Yuan Ren. 1968. A Grammar of Spoken Chinese. University of California Press（台北：敦煌書局　1979）

Cheng, Susie S. 1981. A study of Taiwanese Adjectives. 台湾学生書局

Li, Paul Jen-kuei. 1971. “Twu Negative Markers in Taiwanese.”『歴史語言研究所集刊』No. 43

Lin, Shuang-Fu. 1975. The Grammar of Disjunctive Questions in Taiwanese. 台湾学生書局

ヤーホントフ．Ｃ．Ｅ．1957.（橋本萬太郎訳『中国語動詞の研究』白帝社　1987.）

王　育徳　1957.『台湾語常用語彙』永和語学社

朱　德熙　1982.『語法講義』北京商務印書館

李　献璋　1950.『福建語法序説』南風書局

姚　榮松　1986.「閩南語「有」的特殊用法―國語與閩語比較研究之一―」台湾師範大学国文学報第15期

馬　慶株　1981.「時量賓語和動詞的類」『中国語文』第二期

台湾総着府　1932.『台日大辞典』

〔付記〕

本稿は麗沢大学に提出した卒業論文に加筆訂正したものである。その際，筑波大学の樋口靖先生にいろいろ御指導をいただいた。ここに記して深謝する。

（筑波大学大学院）